

---

# 風魔伝

光琳寺 凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風魔伝

### 【Zコード】

Z2909D

### 【作者名】

洗淋寺 凪

### 【あらすじ】

ここは生き物が魔族と人間族の族、その他動物達に別れる世界。主人公フウゴと相方のハルバスは旅を続けていた。なんのために？理由は分からない。ただ旅をしているのだ。それが魔族と人間族を繋ぐ時のルールだから・・・。

**†説明書（必読ー）+（前書き）**

これは風魔伝の用語など の説明書です。

## † 説明書（必読！） †

† 説明書 †

†主人公†

風邪くフウゴゝ族に人間族。風魔師である。

†相方†

ハルバス：族に魔族。風魔である。

†用語†

人間族：人間

魔族：人間とは違い、不思議な力を持つ。魔族の中にも種類があり、不思議な力の種類によって魔族の種類も変わる。魔族は人間には直接見えない。

風魔くふうまゝ：風を司る魔族。

雷魔くらいまゝ：雷を司る魔雷。

炎魔くえんまゝ：炎を司る魔炎。

水魔くすいまゝ：水を司る魔族。

魔導師くまどうしゝ：魔族とね契約を結んだ者のことを行う。分類の仕方は契約を結んだ魔族によって変わり、契約を結んだ魔族の力によつて呼び方が変わる。

断裏の契約くだんりのけいやくゝ：魔族との契約の名。

デビドル：魔族に入るぬいぐるみ。契約を結んだ魔族は普段、これに入り主の魔導師と共に生活をする。デビドルにはいろいろな種類があり、ただの動物の形をしたデビドルから乗り物になるデビドルまで八百万！

## † 説明書（必読！）+（後書き）

この小説は短編の連載です！プロローグを除いた作品はほとんど話しが一つの話して終わります。繋がっていません。つまり簡潔するわけです。プロローグを読んだら後は適当に話しを選んでいいです。では^\_^；

## プロローグ

「君は誰？」

「僕？僕は……」

今僕の目の前には目には見えないしゃべる何かがいる。

「僕は風邪って言うんだよ！」

「フウゴかあ！いい名前だね！」

「君、名前がないの？」

「うん……」

「そうだな……」「リザベスなんてのはどう？」

「いや、僕は男だよ？」

「ハルパス！ハルパスなんてのはどうだい？」

「お兄ちゃん！？」

「ハルパス、なんかいい響きだね」

「君は魔族だね？」

「そうだよ！」

「フウゴ」と……断裏の契約を結んでやつてくれないか？」

・・・それがオレとハルパスの出会い……。

あれから五年は確実に経っている。

「フウゴ……お腹減った……」朱いプチドラゴンのドビードルに入ったハルパスが頭の周りを飛び回る。

「んもう！邪魔！」オレはハルパスを叩く。

「お、獲物見つけ！」

「でかしたハルパス！」そこには一匹の野兔。悪いが食料となつて貰おう。

「いけ、ハルパス！」

「りょーかい！」

周りの空氣に緊張が加わる。ハルバスの力だ。

野兎の動きが一瞬止まる。ハルバスの殺氣を感じたようだ。力強く地面を蹴る。追尾開始だ！

「ハルバス！バイクのデビドルに乗り換えて！」

「いや、このままで大丈夫！」

「はいはい」

朱いピチドライゴンがさらに紅く染まる。野兎の血だ。

「つたぐ、洗濯しなきゃなんないじゃんか！」

「いいじゃん別に！それくらい！飢え死にするよりましでしょ？」

「非常食があるから平氣です～～～」

「フウゴガよくてもこつちはやなの！あんな砂！」

そう、オレが持つ非常食とはミネラルを沢山含んだ粘土。確かに美味しいと言つたら嘘になる。しかし飢え死にするよりはましだろう。

「ま、早く調理しようよ！」

「はいはい・・・」オレは腰のナイフポーチから一本ナイフを抜き取る。

「相変わらず凄い武器の量だね」

「ああ、オレはハルバスみたいに不思議な力を持つてないからね！自分の命は自分で守なんなくちゃいけないしね」オレの武器はナイフだけでは無い。腰に一本のハンドライフルを二丁、背中には何発も同時に撃てる巨大なマシンガン。頭にかぶっている帽子には剃刀が三つ。着ているコートの内側には所狭しとメスがある。

「さ、出来た。ハルバス、食べるよ！」

「お、さすがはフウゴ！料理が上手いね！兎の肉と非常食のトッピングなのに美味しそう！」

「次の街に着けばレストランかなんかに行けるんだけどね～～」

「あー。この前止まつた街が懐かしい」

「駄目だよハルバス！街に長くいすぎると力が鈍つてすぐに負けちゃうよ！それに断裏の契約の時だつて魔族は街の定住を禁止する。

つてあつたじやん

「そりなんだよね～～

「ま、次の街へ向かおつよ」

「そりだねー。んじやご馳走りま～～

「はいはい、じゃ、行こうつか」オレは満腹のお腹をさすりながら立ち上がる。

「ねえフウヽ(￣へ￣)」「

「何か?」

「この前戦つた炎魔の野郎にさ、」

「うん」

「今付けられてるよ」

「え、ええ～～～～～!？」

「御明答!よく気付きましたね」草むらから長身の男と兎。無論、兎の方が炎魔だ。こいつらとは以前完敗している。しかしさか付けられていたとは。

「いつから付けていたんですか?」

「君達に勝つた時からさ」

「目的は、何ですか?」

「そんなの簡単さ!僕は君の魔族、たしかハルバス君とか言つたつけ?に興味があるんだ!あの時戦つた時はまだ未熟だったが、今なら楽しめそうだ。『口ネも同じ意見だ!』

「口ネと呼ばれた兎(炎魔)はハルバス同様のデビドル、プチドラゴンのデビドルに乗り換える。

「勝負をしようじやないか!同じプロチドラゴンのデビドル同士で!これなら公平だろ?」

「オレは構いませんよ。最近誰にも会わずに退屈していた所ですから。ハルバスは?」

「否、絶対やだね。公平だとかいながらどうせいつも利用するつもりなんでしょう?」

「お、ハルバス君は少し頭が切れるようだね」「やつぱり」

「ハルバス、どういう事?」

「断裏の契約を結んだ魔族、魔導師はね、旅の時に他の断裏の契約

を結んだ魔族、魔導師とパー・ティーを組む事を許されているんだよ！  
「はい、御次はそちらがどうぞ」ハルバスが言うとバトンを渡された長身の男が言つ。

「そして魔族のコンボがあつてね！炎魔のコンボで一番使えるのが風魔なんだ！風魔がエチコード（風魔の使う技の中で最もポピュラーな技）に炎魔がファイ（炎魔の使う技の中で最もポピュラーな技）をぶつける。すると爆発が起きて相手に莫大なダメージを与える。それに敵が複数の場合は敵全体にダメージを与えられる」

「つまりオレ達とパー・ティーを組みたいんですか？」

「いや、僕達はそれを戦闘で使おうとしていた。いや、まだするつもりかな？」

「どういう意味？」

「つまりフウゴまでダメージを受けちゃうって事！」

「なんだって！？人間族が魔族を故意に攻撃するのは許されているが魔族が故意に人間族を攻撃するのは禁止されているじゃないか」

「そう、しかし僕はそれを故意に見せずに攻撃出来る」

「何ですか？」

「コンボが自然に起きたように見せればいい。今君達だつて僕が言わなきや知らなかつただろ？」

「フウゴは知らなかつたけどこつちは知つてたよ

「だが確信は無い」

「うつ・・・・・」

「だろ？ま、言つちやつたからには確實に殺さなきやね。コロネ、行くよ」コロネが空を切る。そしてハルバスが朱く染まって行く。

「ハルバス、大丈夫？」

「大丈夫、フウゴも気を付けて！あいつら本まじ氣で殺すつもりだよ」  
実際コロネは殺氣だつている。

「エチコード！」ファイを覚悟でオレはハルバスに指示を出す。

「ファイ！」やはりそう来た。目の前で爆発が起きる。

「フウゴ！」ハルバスがオレに寄つて来る。

「聞いてくれ！オレに考えがあるんだ……」

「よくここまで来て生きていられたね、感心するよ。立てるかい？」  
「余計なお世話です」とは言つた物の体はもうボロボロ。次で作戦を成功させなければ本当に死んでしまう。

「ハルバス、あれ行くよ！」

「え！？あれ行っちゃうの？」

『あれ』とは、オレ達が今まで旅を続けて中で編み出した禁断の技。下手をしたらハルバスの命まで危うくなる。

「何が来たつて僕達は負けませんよ」

「の構え！」

ハルバスが前ならえの構えをする。

「成る程、無拍子か」

「残念。さ、ハルバス！死ぬなよ」

「りょーかい」

「コロネ、構えろ。来るぞ」

「3、「

「2、「

「1、「

「ジ、エンド」

途端にハルバスのが消える。朱く染まつたブチドラゴンのゲビードルがすとんと落ちる。

「デビドルから抜けたつて魔族同士ならお互いが見えるのを君は忘れたのかい？」

「いいえ。覚えてますよ」

「なら何故？」

「妖音、ハルバスが・・・・・いない」

「ほう、妖音さんというのですか。ま、ハルバスが見えないのは当たり前でしょうね何せ現実にはいないんですから」

「なら魔導師の貴方から潰させて頂きます。行け！」

「でも人間族を攻撃したら……」

「躊躇するな！さっきまでガンガン攻撃してただろ！」

「わ、分かつたよ妖音」

「口ネがオレに向かつて炎を吐く。大丈夫、心配はいらない。ボワという音がした。オレの目の前で炎が炎上。もちろんダメージは受けない。

「ど、どういう事だ？何故生きてる！？」

「それは貴方が……愚か者だから」

「僕が……愚か者だと？」

「ああ。今だつて……」

「妖音」

「どうした！？ 口ネ？ んなつ！？」

「ね、言つた通りでしょ」

デビドルに入った口ネは宙でもがいでいる。

「ハルパス、やつちやいな」

「りょーかい！フウゴー！」

「エチュード」

「あいつ大丈夫かな？」

「うーん。あの距離でエチュードを喰らつたからどうかな？ ま、妖音さんがどうにかするさ」

「にしてもフウゴの判断は凄かつたよ」

「ありがとっ！ ま、オレは倒さなくちゃいけない奴がいるからな。あれくらいで失敗してちゃ奴には勝てない」

「ソーヤだね？」

「ああ」

「さ、次の町に着くよ」

「りょーかい！ ついたら新しいデビドル買つてね。気持ち悪くてしかたがない」

「はいはい」

そしてオレ達は次の町へ向かつて歩を進める。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2909d/>

---

風魔伝

2010年10月17日02時29分発行